琉球大学学術リポジトリ

コメント5

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2017-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 直井, 岳人, Naoi, Taketo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008529

観光科学　第 8 号　（平成 28 年 12 月）pp.87-89
Journal of Tourism Sciences. Vol.8 (December.2016)

コメント 5

直井　岳人*
Taketo NAOI

本論文は、人が観光目的で日常生活圏外の環境を訪れるという現象の背景を、発動要因と誘因要因の関係という枠組みの中で、従来の観光研究では見落とされがちだった視環境・光環境要素を誘因要因と位置付けて説明しようとしたところに独自性と意義がある。つまり、観光研究の知的枠組みを踏襲しつつ、環境科学の知見を注入することで、従来の観光研究では接触しえなかった領域への一歩を踏み出そうとする、新たな Multidisciplinary（多重学問領域的：別個の学問領域における知見の参入により発展する）[1] な知の創出への試みである。

視環境要素や光環境要素は、本論文で述べられているように、従来の観光研究の枠組みの中でも魅力要素として認識はされていたものの、名所旧跡のような社会的に広く認識された顕著な訪れる価値を持つ観光資源と比べ、顕在性のなさ故に実証的な研究の対象とはなりにくかった。また、景観色彩環境要素における「感覚的」、「生理的」意味の観光者にとっての重要性については、Pearce [2] の枠組みで「生理的欲求」が旅行経験の少ない観光者にとって重要な欲求として位置づけられているように暗黙的には認識されていたと考えられるが、データ収集の困難さ故か実証研究は乏しい。つまり、従来の観光研究においては、個人あるいは社会が明確に認識しやすく訪問地選択の明確な理由となりやすい環境の「心理的・意味的」観点に注力 [3] するが、「生理的・感覚的」な意味については取り組みが充分ではないと言える。

しかしながら、本論で主張されているように、環境の「生理的・感覚的」な意味は、そもそも人が日常生活圏外の環境に移動しようとする基本的な欲求の背景を説明する上で無視できないものだと考えられる。一般の人が、環境、特に通常意識にのぼらない日常環境の明度・彩度といった色彩要素や照度・輝度といった光環境要素の違いを明確に認識し、それを訪問地選択の基準とすることは考えにくい。しかし、そのような明確な認識が無く最終的な訪問地選択の基準とはなりえずとも、例えば、日照時間が少なく照度・輝度が低い環境に住む人にとって、居住環境より相対的に長い日照時間や強い照度・輝度といった要素が、そのような要素を持つ地域一般へ訪問を促す要因となることは十分考えられる。

「どこか遠くへ行きたい」という歌の一説があるが、人間は具体的な訪問地を意識せずとも「遠いどこか」に行きたいと願う場合がある。そのような「遠いどこか」の特徴として、人が明確に意識せず、それでいてその人の日常環境と根本的に異なる景観色彩環境要素は、重要な役割を果たすのかもしれない。ただ、今後、実証研究の要因として景観色彩環境要素をどのように扱うかについては課題が多く、残念ながら本研究においても具体的メソッドが提供されているとは言えない。例えば、景観色彩環境に関する専門知識を持たない一般の観光者、あるいはそのような立場の被験者に、環境の明度・彩度といった色彩要素や照度・輝度といった光環境要素の違いを認識させることは難しく、まして、そうした要素の彼らの心理的影響を評定させることは非常に難しいであろうことは想像に難くない。これは、景観色彩環境要素の顕在性のなさに加え、本論でも「環境要素間関連性」という概念をキーワードに論じられているように、景観色彩環境等が、熱・音環境といった環境要素や社会システムや文化的側面といった他の要素と関連し合って、人間にとって意味のある環境を構成していることに基因していると思われる。つまり、複合的に絡みあう環境要素の中で、とりわけ顕在性の弱い景観色彩要素の影響のみを切り

*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域

出すことは困難であり、またそのことが人にとっての環境の意味を研究する上でどれほど意義のあることかという問いも生じる。

ただし、当該研究は、以上のようなリミテーションを有するものの、環境工学研究が依拠している居住環境等（日常環境）の管理・計画の理論的根拠という視点を超えて、発動要因と誘因要因の関係性を通しての観光資源管理学に資する新しいメソッド開発の一助になると考えられる。

ここで考えられる将来の実証研究の方向性としては、景観色彩環境要素の影響を他の環境要素との関係の中で研究することが挙げられる。例えば、ビーチへの訪問を考えた場合、照度や輝度がその場所を訪問地として選択する第一義的な基準とはなりにくいだろうが、同じようなビーチであれば、照度や輝度がビーチの選択決定要因となりうる、あるいは相対的に少々美しさに欠けるビーチであっても、照度や輝度が高ければ、高緯度地域の居住者には好まれるという関係があるのではないかと考えられる。つまり、メインとなる観光地の魅力要素とサブとしての景観色彩環境要素の交互作用を導き出すことができるのではないかと期待され、それには、景観写真評定実験など、刺激となる環境要素を統制することに長けた景観工学の手法が有効ではないかと考えられる。

環境は多様で複雑な要素を内包しており、その訪問客心理への影響は、種類、顕在性、影響力が特に強くなる人の欲求喚起の段階など様々な側面において異なる。つまり、分かりやすい環境要素だけが人の観光行動を説明するわけではないということである。観光研究における、観光地内の観光者向けに演出された空間と住民向けの空間を示す「フロント・バック」[3] や Enclave/heterogeneous spaces [4] の枠組みなど、近年の、観光地における地元の生活の様相が訪問客の観光地評価に与える影響に関する研究 [5)6)] は、観光地における顕著ではない環境要素の存在とそれらが持つ訪問客にとっての意味を示している。本研究が提唱する観光地の景観色彩環境要素と観光者との関係に関する研究の枠組みは、一見副次的でトリビアルに思える要素の観光行動の生成に対する影響の重要性を通して、観光資源管理に関する知見を発展させる可能性があり、非常に重要なものだと考えられる。

参考・引用文献

１） Tribe, J. (1999). The Philosophic Practitioner. PhD University of London.

２） Pearce, P.L. (1988). The Ulyseese Factor: evaluating visitors in tourist settings. Springer-Verlag.

３） MacCannell, D. (1976). The tourist: a new theory of the leisure class, Los Angeles: University of California Press.

４） Edensor, T. (2000). Staging tourism: tourists as performers’. Annals of Tourism Research, 27(2), 322-344.

５）直井岳人　ほか（2014）. 歴史的町並みにおける訪問客のまなざしの差異と町並みの印象との関係: 岐阜県高山市の歴史的町並みをケースとして　観光研究 , Vol. 26, No. 1, 47-60.

６） 直井岳人　ほか（2013）. 観光地としての歴史的町並みにおける地元の生活の様相 : 訪問客のまなざしの対象と、それに対する住民の評価　都市計画論文集 , Vol.48, No.1, 82-87.